

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

ジュゼップ・ナバロ・サンタウラリアとその文学

田澤, 耕 / Tazawa, Ko

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

71

(発行年 / Year)

2005-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002008>

ジュゼップ・ナバロ・サンタウラリアとその文学

Josep Navarro Santaaulàlia i les seves obres

田澤 耕・TAZAWA Ko

1. はじめに

本稿の目的は、現代カタルーニャ語文学の中堅作家として活躍するジュゼップ・ナバロ・サンタウラリアとその作品を紹介することにある。

スペイン内戦（1936-39）後のカタルーニャ語文学の歴史は、おおまかにつぎのようにまとめることができる。¹⁾

1939年のスペイン内戦終結後に成立したフランコによる独裁政権のカタルーニャ語文化弾圧の下で、カタルーニャの文学者たちは二つの道のうち一つを選ばざるを得なかった。一つは、地下に潜って文学活動を続けることである。Joan Perucho（1920-2003）、Manuel de Pedrolo（1918-1990）、Maria Aurèlia Capmany（1918-1991）、Josep Maria Espinàs（1927-）らはその道を選んだ。もう一つの道は、国外亡命である。傑作「ダイヤモンド広場」²⁾によって我が国でもその名を知られるMercè Rodoreda(1909-1983)はフランスへ亡命し、Pere Calders(1912-1994)やAvel·lí Artís-Gener, 'Tísner'（1912-2000）らはメキシコに身を寄せた。

1975年にフランコが死去し、スペインが民主化への道を歩み始めると共に、カタルーニャ語も文学語として市民権を取り戻す。潜伏していた作家たちは

次々に作品を発表し、亡命していた作家たちも帰国し始めた。こうして戦後カタルーニャ文学の基礎が作られたのである。このような流れを受け継いだのが、「70年世代」と呼ばれるようになる一群の若い作家たちであった。

Jesús Moncada (1941-), Terenci Moix (1942-), Isabel-Clara Simó (1943-), Jaume Fuster (1945-1998), Montserrat Roig (1946-1992), Jaume Cabré (1947-), Carme Riera (1948-) らをその代表として挙げるができる。

その中にRamon Solsona (1950-), Ferran Torrent (1951-), Quim Monzó (1952-), Miquel de Palol (1953-), そして本稿で取り上げようとしている Josep Navarro Santaaulàlia (1955-) らを含めることもできるとは思うが、筆者としては、むしろこの世代を二つのグループに分ける立場を取りたい。その理由は、年齢が若干上である第一のグループの文学的評価がすでに定まって来ているのに対し、後者のグループには、今後どのように発展していくのか注目したい作家が多いということによる。もっとも、Torrent, Monzóは、すでに代表作もいくつもあり、高い評価が定着しつつあるのだが。

このようなパースペクティブを考慮に入れれば、サンタウラリアのような作家を取り上げるということは、作家自身を紹介するのみならず、今後のカタルーニャ語小説の行方を占うことにもなると考えられるのである。

以下、本稿では、まず、サンタウラリアの履歴を簡単に紹介し、その後、最新作である「水色の瞳」の梗概を載せる。作品の日本語訳が出版されていない事情に鑑み、作風を紹介する上で有用であると判断するからである。最後に、カタルーニャ文学の現状、自身の文学に関する、サンタウラリアとの一問一答を掲載する。

2. ジュゼップ・ナバロ・サンタウラリアとその作品

ジュゼップ・マリア・サンタウラリアは1955年、スペイン、カタルーニャ地方、ジロナ県のパニョラスに生まれた。現在も同地で暮らしている。

この辺りは、中世にあって、イスラム教徒の手からもっとも早く奪還され

たいわゆる「旧カタルーニャ」に属し、カタルーニャ的な文化がよく残っている地として知られている。バニョラスは火山性の美しい湖水で名高い、地方の中都市である。後に述べるように、生まれ育ち、そして現在も生活している土地の、このような風土や特色がその作品に色濃く反映されている。

サンタウラリアは、地元の高校でカタルーニャ文学を教える傍ら、詩人として文学的キャリアを開始した。「肉の記憶」*Memòria de la carn* (1986) がその処女詩集で、Miquel de Palol賞という賞を受賞しているので、ある程度注目されたものと考えられる。続いて、「ことばの問題：シンボリズムから純粹詩へ」*Qüestió de mots: del simbolisme a la poesia pura* (1989) という、詩の言語に関する評論を発表し、Salvador Espriu賞を受けた。これは前の賞よりも権威のある賞である。

1990年、初めての短編小説集「遺失物」*Objectes perduts* (1990) が出版される。その後しばらく間を置いて、1996年、長編小説「黒い土」*Terra negra* (1996) を発表した。1833年、スペインでは、イサベル二世の即位をきっかけに、前王フェルナンド七世の弟カルロスを後継者に推すカルロス党が反乱を起こす。第一次カルリスタ戦争である。これはイサベル派=進歩派とカルロス党=保守派との闘いでもあり、1860年まで、断続的に継続される。「黒い土」は、この戦争を舞台とする歴史小説である。冒険あり、ロマンスありのこの小説は、構造がしっかりとした読み応えのある作品であった。筆者などは、この方向に進めば、名歴史小説家が誕生するのでは、と期待したのだが、その後、歴史小説は手掛けていない。なお、サンタウラリアが住むジロナ県など北部カタルーニャはカルロス党の活動が活発だったところである。

翌年発表された「引き潮」*Marea baixa* (1997) は、芭蕉、蕪村、一茶などの俳句を、日本人協力者と共に翻訳したもので、サンタウラリアの日本文化、とくに俳句への傾倒振りをはっきりと示すものとして画期的であった。(これに先立ち、サンタウラリアはすでに日本語の学習を始めている。) その後彼は、2000年に文部省の奨励金を得て3ヶ月間日本に滞在し、その印象を*Pagodes i gratacels. Un viatge al Japó* 「五重の塔と摩天楼：日本への旅」(2001) という旅行記に結晶させることになるのである。この作品は、伝統と先進性の混在

する日本社会を作家の鋭い目で描いた傑作である。

この後、詩集としては、「水の中の光」 *La llum dins l'aigua* (1996)、「草の上の陰」 *Una ombra a l'herba* (1998) が発表されている。「水の中の光」は中世に起源を持つ詩の競技会「花の宴」 *Jocs Florals* で1996年に最優秀賞を受賞している。

「球根」 *Bulbs* (1999) は、サンタウラリア初のロマンティック・ミステリーであるという点で意味深い。なぜなら、この後、一貫してこの方向性が維持されるからである。「黒い土」の巧みなストーリーテリングはここでも遺憾なく発揮され、翌年、*Serra d'Or* 評論家賞を受賞した。カタルーニャ語小説最高の賞、サン・ジョルディ賞を頂点とするいくつかの賞の中でも、ムンセラ一修道院³⁾の出版部が中心となって選抜する歴史と権威のある賞である。翌年、発表された「不在」 *L'absent* (2000) には、幾分、迷いが見られ、前作ほどの評価を得ることができなかった。しかし、2002年に満を持して発表したロマンティック・ミステリー「水色の瞳」 *Ulls d'aigua* (2002) は、傑作と評判になり *Columna* 賞を受賞した。⁴⁾ この作品の舞台は、まさに作家の居住するバニョラスで、湖水や、この辺りに多く見られる作物収穫のためのアフリカ人移民などが重要なモチーフとなっている。

3. 「水色の瞳」

すでに述べた通り、日本語に作品が翻訳されていないサンタウラリアの作風を垣間見られるように、以下に最新作「水色の瞳」の梗概を記す。

■主な登場人物

ライア：主人公の女性。作家サルバドール・イバルスについての博士論文を書いている大学講師。

サルバドール・イバルス：三年前に湖で溺れ死んだとされる作家。

メル：生前イバルスが住んでいた湖沼地帯を訪れたライアが貸し別荘を借りた不動産会社の社員。離婚歴あり。ライアに気がある。

ドゥーケ：イバルスの親友だった画家。気難しい性格の持ち主。イバルスの晩年には仲違いしていたらしい。

ルイズ：イバルスの妻。元編集者の美人のフランス女性。イバルスの晩年には離婚状態にあった。

バヌー：イバルスの家で下男をしていた、アフリカからの違法移民。

■あらすじ

季節は冬。大学講師であるライアは、作家サルバドール・イバルスが溺れ死んだとされている湖のほとりの別荘へ一ヶ月の予定でやって来た。イバルスに関する博士論文の、作家の伝記に係わる部分を仕上げに来たのである。不動産会社の社員メルは、湖から離れた近代的なアパートを勧めたが、ライアは敢えて、湿気がひどく寒い湖畔の一戸建てを選んだのだった。メルの態度にはライアに気があるようなところが伺われた。

ライアの状態は最悪だった。しばらく前に、親友に恋人を奪われてしまったこと、元は有能な弁護士だったにもかかわらず、夫に捨てられた後は「ひきこもり」となってしまった母との確執、自分と母を捨てて恋人の元へ行った今は亡き父親への複雑な思い、いろいろな悲しみや悩みが、湿っ払い別荘の中に一人切りでいると一層募るのだった。

ライアはまず、作家の親友であったという画家のドゥーケを訪ねることにした。湖の近くに住んでいるのである。ドゥーケは五十過ぎだが、まだ十分に男性的魅力のある人物だった。性格は粗野で、それに相応しい荒々しい抽象画を得意としていた。生前の作家についていろいろたずねるライアに対しては、「死肉をあさるようなまねはするな」と、無礼とも言えるほど不親切だった。ライアは腹を立ててその場を立ち去った。

落ち込み気味のライアのところに不動産屋のメルが、作家の別れた妻ルイズが、作家が住んでいた「蔦屋敷」を記念館にする件でこの村にやってくるので、会えるように計らっても良い、という朗報を持って来てくれた。ルイズは作家の晩年、その元を去って画家ドゥーケと同棲するようになっていたのである。また、画家もそれと前後してイバルスと絶交していた。

ルイズはとても魅力的な女性だった。イバールスがパリに本のプロモーションで行ったときに世話をした編集者で、そのままイバールスについてスペインへやってきて結婚してしまったのだった。イバールスに関することで特に目新しい話が聞けたわけではないが、一つ奇妙な物を見せてくれた。作家が大事にしまい込んでいた、少し焦げた女の子用のパジャマである。イバールスが幼少の頃、唯一仲のよかったモニカという従姉のものだった。女の子は流行り病で死んでしまい、その衣服などは全部焼かれてしまった。パジャマは、すんでのところまでイバールスが炎の中から取り出したものだったのだ。

イバールスは夜、泳ごうとして飛び込んだときに、過って頭を打ち溺れ死んだということになっていた。ライアはその死に方にわずかながら疑問を感じていたのだが、ルイズに案内されて彼らがよく泳いだという場所に行ってみて、その死因がおかしいということを確認したのだった。地形から行って、頭を打つなどということが考えにくかったからである。では、どうやって死んだのか？作家の死に係わる謎は深まって行く。

イバールスの生前、「葛屋敷」には、黒人の大男バヌーが下男として雇われていた。アフリカからの不法移民だったのだが、作家に雇われた後、労働許可を取得、妻を呼び寄せて、一女一男をもうけていた。雇ってもらったことを恩義に感じるバヌーは、忠実な下男であった。大酒のみで、しばしば飲みつぶれるイバールスの世話をよくみていた。バヌー一家はイバールスの死後間もなく屋敷を出て、アパートで暮らすようになっていた。

意外なことにドゥーケがライアを訪ねてきた。先日のお詫びに自作の絵を届けに来たというのである。これがきっかけで後日、ライアは再びドゥーケのアトリエを訪ねることになる。ドゥーケは自分が征服した女性を絵に描きコレクションをしていることを知り、ライアはますます反感を募らせた。(ドゥーケはすでにライアの肖像を描き始めていたのである。)しかし、なぜかその男性的魅力には抗しきれず、ついに関係を持ってしまう。ただ、イバールスとの仲違いの原因については納得の行く答えはえられないままだった。ルイズとの三角関係かとも考えたが、イバールスはむしろその関係を認容して

いたらしかった。ドゥーケは絶交して以来イバールスにはその死まで一度も会ったことはおろか口をきいてさえいない、と言った。

今は海岸に近いところに移っているルイズからライアに連絡があった。見せたいものがあるというのである。訪ねて行って見ると、それは、ある売春バーのコスターだった。その裏にはある女の名前と電話番号が記してあった。

ライアは、現在はガソリンスタンドを経営しているバヌーにも会いに行った。イバールスの屋敷を出た理由をたずねたが、子供も大きくなり始めていたし、そろそろ独立してもいいころだと思ったという曖昧な答しか引き出せなかった。会話中、なにかそわそわしているバヌーの様子はライアに疑念を抱かせるに十分であった。

ライアは、自分に気があるメルを利用し、無人の「蔦屋敷」に入れてもらった。いろいろ探し回った末、暖炉の燃えカスの中から、少女の足先のようなものが写っているポラロイド・フィルムの切れ端を見つけ出した。さらに、電話料金の請求書から、死の当日に「蔦屋敷」からドゥーケへの通話があったということも突き止めた。

このとき、屋敷の床を汚すことを嫌ったメルは裸足で歩いていたら、何かで足を切ってしまった。血で汚れた床を拭くときにライアは、床板の隙間にガラスの破片が挟まっているのを見つけた。もしかするとイバールスの眼鏡レンズの破片かもしれない。だが、強度の近眼だったイバールスの眼鏡の破片が、なぜ事故現場ではなく、ここにあるのか？ ライアは事の真相の一端を垣間見たような気がした。

ライアは自分が集めた証拠を持って、ドゥーケをバーに呼び出した。電話の領収書、村の眼鏡屋で眼鏡レンズだと確認してもらったガラスの破片をドゥーケに見せて、真相を話してくれるように迫った。しかし、イバールスからの電話は罵詈雑言が留守番電話に記録されていただけで話してはいない、レンズの破片などなんの証拠にもなりはしない、と上手く言い逃れられてしまった。

あまり気は進まなかったものの、ライアはコスターの女に会いに行った。

女は童顔で小柄のロシア人女性であった。その話によると、イバルスは馴染みの客で、しばしばホテルに呼び出されて、幼女のかっこうをさせられたという。そのとき写真を撮られたことはあるか、という問いに、女はない、と答えた。写真に写った幼女の足の先。しかし、それはこの女のものではない……ライアはそのとき事件の全貌に気付いたのだった。

ライアはバヌーが住む移民街を訪ね、彼を公園でつかまえることができた。ライアは自分の推理をバヌーに話した。少女偏愛性癖を持つイバルスがバヌーの娘に興味を持ち、ついにはバヌーの留守にその体に触ったり、写真を撮ったりしたのではないかと。それを怒ったバヌーが作家を殺したのでは？と。ついにバヌーは自分が作家を殺したことを認めたが、事故だったという。バヌーの妻が掃除のときにたまたま娘の裸の写真をみつけ、バヌーに見せた。それを持ってバヌーがイバルスを問い詰めると、いつものように酔っていた作家は殴りかかってきた。攻撃をかわしているうちに、はずみで突き飛ばしてしまい、頭を暖炉の角で打った作家は息絶えてしまった、というのである。

慌てたバヌーは、作家の友人として以前から見知っていたドゥーケに電話をした。(これが死亡当日の通話だった。)バヌーを気の毒に思ったドゥーケはすぐにやって来て、偽装工作を手伝ったのだった。

ライアは、ドゥーケの元を訪ねた。すでに真相を聞きだしたことをドゥーケは知っていた。イバルスと絶交した理由は、その少女偏愛性癖を非難したことだった、ということもドゥーケは明かしてくれた。事件を表ざたにしたくないドゥーケは証拠を引き渡すようにライアに迫った。真相を警察に話す気がなくなっていたライアは、自分の肖像画と引き換えに渡してもいい、と答えた。画家は当初渋っていたが、ついに折れて交換に応じた。

こうしてライアの「調査」は終わった。イバルスとドゥーケ、強烈な個性と付き合うことにいささか疲れていたライアは、平凡だが、いろいろと気を遣ってくれた不動産会社のメルに安らぎを見出すようになっていた。二人の関係の進展がほのめかされ物語は終る。

4. まとめに代えて

——ジュゼップ・ナバロ・サンタウラリアとの対話⁵⁾——

カタルーニャ語文学の現状、自らの文学的位置づけ、カタルーニャ語とスペイン語の問題、などに関するサンタウラリアとの一問一答を以下に掲載して、本稿のまとめに代えたい。

——カタルーニャ文学の現状をどう見ますか。たとえばスペイン文学やフランス文学と比較して。カタルーニャ語文学に未来はあるのでしょうか。

——全体的に見て、カタルーニャ文学は、デンマーク文学、スウェーデン文学、オランダ文学など、言語人口が似通った言語の文学に十分匹敵する水準にあります。小説家、詩人、劇作家、いずれもレベルが高く、その意味では、かつてないほど隆盛であると言えます。しかし、当然のことながら、作家の数においては、フランス文学、英文学、独文学、スペイン文学には及ぶべくもありません。

カタルーニャ文学の将来については、私はあまり楽観していません。一つの文学が正常に成立するためには、正常な言語状況、環境が必要です。カタルーニャ語の社会的使用は衰退傾向にあり、このことがいずれはカタルーニャ語文学に否定的な影響を及ぼすでしょう。解決法は、我々の言語を断固として防衛することしかありません。デンマーク語、ギリシャ語、オランダ語、スウェーデン語は、それぞれの国家の公用語になっていて、カタルーニャ語よりも確固たる基盤を持っています。カタルーニャ語は歴史的には重要な言語ですが、EUの公用語にさえ指定されていません。国家に分割されたヨーロッパの中で、カタルーニャ語は稀有な状態に置かれているのです。つまり、国家を持たない言語として現在まで生き延び、しかもレベルの高い文学を生み出したのですから。しかし、我々はさらに毅然とした態度で言語を守り、日常生活でもっと使われるようにしなければなりません。さもないと、将来は暗いものになってしまうでしょう。

——その中で、あなたは自分の文学をどのように位置づけていらっしゃるの

ですか。

——難しい質問ですね。私はどちらかと言うとアウトサイダー的で、どのグループにも属していません。文壇にはあまり興味がないのです。(文壇と文学は別物ですから。)つまり、文学界の動きや流れからは外れているわけです。もしかすると、個人主義的な傾向が強すぎるのかもしれません。ただ、私は作家としての創作意欲では人に負けないつもりです。(作家というものは、虚栄を張ることなく、意欲的でなくてはならないと思うのです。)私はしっかりとした構造を持った、よい仕上がりの作品を残したいと思っています。つまり、後世に残るような作品です。(そのような作品は実に少ない。)思う通りに行くかどうかわかりませんが、できる限り努力するだけです。自分のスタイルと技術を磨き続けるしかありません。作家にとって最も重要な資質は「頑固さ」だと常々思っています。「七転び八起き」(作家は、日本語でこう言った。)の精神ですよ。

——詩集、俳句、歴史小説、推理小説、旅行記、とさまざまな種類の作品を発表していらっしゃるようですが、それは自分が本当にやりたいと思うことを模索しているのですか、それともほかに何か意図があるのでしょうか。今後もこの傾向は続くのでしょうか。

——たぶん、私が旺盛な好奇心の持ち主で、少しもじっとしてられないということが原因なのだと思います。いろいろなことをするのが好きなのです。いつも同じ道を歩いて行くということは苦手です。小説を書いているときには、前作とできるだけ違ったものにしようと努めさせます。これは好みの問題ですから、これからも変わらないでしょう。劇作も手掛けてみたいと思っています。何度か試してみたのですが、今のところ上手く行っていません。まだまだ勉強が必要ですね。

——あなたの日本文化に対する興味は、どこから来ているのでしょうか。ご自分の作品に日本文化の影響が見られると思いますか。

——私が日本文化に興味を持つようになったきっかけは俳句に出会ったことです。40歳の頃で、ほんとうにショックを受けました。魅了されてしまったのです。俳句のおかげで、日本を訪れ、日本語の勉強を始め(いつかマスタ

一できればいいのですが)、陶器、絵画、建築等々の日本美術に親しむようになりました。カタルーニャ語で俳句も作り始めましたし、日本についての本も書きました。俳句を読んだり、書いたりし、ほんの少しですが、日本の社会に足を踏み入れることができるようになったことに私はとても満足しています。当然、日本文化、とくに詩は、私の作品に大きな影響を及ぼしています。小説でも詩でもそれは同じことです。簡単に言えば、西洋の作家は、大きなテーマを扱うには「大きな」ことばが必要だと思いがちです。しかし、俳句は「小さな」ことばで、昔からある大きなテーマを扱うこともできるのだということを教えてください。日々のことば、とるに足らない小さなこと、はかない感情（それらが俳句の基礎だと思うのですが）の中に読者は深みを感じ取って、引きつけられるのです。大袈裟なことばには用心せよ、直接的な物言いはせずに包み隠して表現せよ、示唆し、暗示せよ、自然で簡潔で謙虚であれ—俳句はこのような文学の奥義を、まことに有効な方法で教えてくれるのです。

—カタルーニャの作家の中にはスペイン語で作品を発表する人もいますが、どのように思いますか。

—言語を選ぶ基準は、商業的な計算であってはならないと思います。事実、カタルーニャ語のすぐれた小説が、スペイン語の凡庸な小説よりもはるかに売れることはあるのですから。私は誰も批判するつもりはありません。文学は自由なのです。私はただ、自分のことば、カタルーニャ語で、よい作品を書こうと努めるだけです。スペイン語はたしかに偉大な言語ですが、私のことばではありません。スペイン語で書いても、自分の作品のような気がしないのです。確かに、ときには（落ち込んでいるときには）、そのうちカタルーニャ語が消滅してしまって、私の作品も死滅した言語で書かれた文書になってしまうのかもしれない（私自身もそのときには死んでいるでしょうが）と考えることはあります。そんなときには、自分のことばがもっと正常な、使用者人口の多い、前途洋々たる言語であればよかったのにとすることもあります。英語や日本語やスペイン語のような。あるいは、私が大好きなイタリア語のような。しかし、そう思ったところで、どうしようもありません。い

くつかことばは勉強しましたが、自分の言語はカタルーニャ語ひとつだけなのです。

■注 釈

- (1) ここでは、詩、戯曲、評論などにはとくに触れずに、小説を中心に論じている。もちろん、ここに挙がっている作家の中には小説以外の作品を残している人も少なくない。
- (2) 「ダイヤモンド広場」(女のロマネスク7、晶文社、朝比奈誼訳、1974)。ただし、フランス語訳からの重訳である。この作品は、詩的とも言える繊細なカタルーニャ語で綴られており、将来、原語から直接翻訳されることが期待される。
- (3) Abadia de Montserrat. 中世以来のカタルーニャの聖地Montserrat山に建てられた修道院。フランコ時代には、カタルーニャ文化保存に中心的な役割を果たした。
- (4) たとえば、バルセロナの有力全国紙La Vanguardia(2003-4-16)で評論家Joan Solanaは「この作家の新たな頂点」と評し、サン・ジョルディ賞の有力候補に挙げている。残念ながら受賞は逸したが。
- (5) 2003年、法政大学特別研究助成金を受けて渡西し、サンタアウラリアにインタビューをすることができた。その内容をまとめたものである。

Josep Navarro Santaaulàia i les seves obres

TAZAWA, Ko

L'objectiu d'aquest article és presentar Josep Navarro Santaaulàia i les seves obres al públic japonès.

Les obres principals de Santaaulàia (Banyoles, 1955) són: Memòria de la carn (Premi Miquel de Palol, 1986) , Qüestió de mots: del simbolisme a la poesia pura (Premi Salvador Espriu, 1989) , Objectes perduts (1990) , Terra negra (1996) , Marea baixa (1997) , La llum dins l'aigua (1996) , Una ombra a l'herba (Premiat als Jocs Floral, 1996) , Bulbs (Premi de la Crítica 'Serra d'Or, 2000) , L'absent (2000) , Pagodes i gratacels-Un viatge al Japó (2001) , Ulls d'aigua (Premi Columna, 2002) . Amb aquestes obres, Santaaulàia ocupa un lloc privilegiat entre els escriptors joves de Catalunya.

Malauradament, però, no s'ha traduït cap obra seva en japonès. En aquest article, per omplir aquest buit, presentem la seva obra més recent, 'Ulls d'aigua' detingudament. Aquesta és la obra que 'és un cim nou en la seva producció narrativa' segons Joan Solana (la Vanguardia, 16-IV-2003) i pensem que presentant-la podem fer arribar una part important de l'essència de la seva literatura als lectors japonesos.

Tanquem aquest petit article incloent-hi una entrevista amb l'autor sobre la situació actual de la literatura catalana, la seva posició dins la panorama literària de Catalunya, el seu interès per la cultura japonesa i altres temes.